



Title	サマルカンドのイスラム・カリモフ廟を訪れて
Author(s)	帯谷, 知可
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 59-66
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.59
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88342
Type	article
File Information	JB014_014obiya.pdf



[Instructions for use](#)

サマルカンドのイスラム・カリモフ廟を訪れて

帯谷 知可

2016年9月ウズベキスタン大統領イスラム・カリモフ(1938 - 2016)が逝去した後、ウズベキスタンでは初代大統領カリモフの功績を称え、その「記憶の永久化 (xotirani abadiylashtirish / увековечение памяти)」(以下、必要に応じてウズベク語／ロシア語の順で原綴を示す)のための一連のプロジェクトが国家主導で進められてきた[帯谷 2017; 2018]。カリモフの名を冠した基金・博物館・モスクの開設、各地での銅像の設置などとならんで、故郷サマルカンドのカリモフの眠る墓所を「墓廟」化することもそこには含まれており、2017年に入った頃から急ピッチで諸事業が進められていた。

そのイスラム・カリモフ廟は2018年、カリモフの誕生日にあたる1月30日に完成・公開された。筆者は2018年夏、完成後のカリモフ廟を訪れる機会を得たので、ここにその様子を紹介しよう。

ハズラティ・ヒズル・モスクとその周辺

カリモフの墓所はハズラティ・ヒズル・モスクにある。このモスクは、従来あまり修復の手も入っていない、古色美しい比較的こぢんまりしたもので、サマルカンドを訪れた観光客が必ず立ち寄るであろうレジスタン広場からタシュケント通りへ出て、左手にビビ・ハニム・モスク、次いでスィアブ・バザールを見ながら進んでいったなら、その先の丘のきわに控えめな姿を見せていた。バザールから直線距離は近いのだが、行く手は交通量の多い道路によって半ば遮断されており、横断歩道も近くにはなく、ハズラティ・ヒズル・モスクまであえて行く者は稀だっただろう。それは歴史的建造物ではあるが観光資源というよりは地元の人たちのモスクであり、その裏手には墓地が広がっていた。サマルカンドで聞いた話によれば、その墓地にはカリモフの両親も眠っているのだという。

レジスタン広場でムスリム宗務局長が取り仕切る厳粛な葬送儀礼(ジャノザ)が行われた後、カリモフの亡骸はただちにこのモスクの敷地内に準備された場所に埋葬された。その場所を確保するために、元々あった墓などが幾分か整理されたそうである。筆者は2017年1



写真1 2017年1月段階のカリモフの墓

月にもここを訪れたが[帯谷 2017: 48-50]、その時の墓所は、盛り土が白いバラで覆われ、上部に簡易な屋根がかけられているのみで、初代大統領のものとしては質素と表現してもよいような、控えめなしつらえだったのが印象的だった(写真1)。

カリモフの墓所の墓廟化は、まさにカリモフの眠るこの盛り土の上に建造物を構築するだけでなく、ハズラティ・ヒズル・モスク全体とその周辺の大規模な改修、再開発といってもよいほどの大工事を伴うことになった。モスクの正面からも裏手からも墓所にアクセスできるよう、敷地全体が整備され、参詣者用の付属施設なども造られた。

実は、カリモフ逝去の10年ほど前から、タシュケント通り周辺では様々な形で地区改造が始まっていた。その最たる出来事は、タシュケント通り東側に位置していた国立サマルカンド博物館の撤去(と移転)だろう(これについてはサマルカンドだけでなく首都タシュケントの関連分野の研究者や博物館・美術館関係者が一様に遺憾の念を吐露するところである)。かつての博物館とその周辺部のかなり広大なスペースは、タシュケント通りと一体化した市民や観光客の散策の場として整えられた。植樹が行われ、噴水や街灯などが設置された。そしてなぜか新たに2頭の黄金のトラのモニュメントが設置された。こうした事態について地元では、カリモフが年齢を重ねるにつれ、その逝去後にそなえているのではないかと、博物館のあったレジスタン広場の隣接地区に墓所が予定されているのではないかと、というような噂がささやかれていたようだ。しかし、カリモフの記憶の「永久化」にあたっては、先の黄金のトラと噴水が撤去され(黄金のトラは別の場所に移設)、そこにはカリモフの銅像が出現したのだった。

カリモフ廟建設が決まったことによって、この地区改造がそれまで整備の及んでいなかっ

たハズラティ・ヒズル・モスクのある丘の側にも及ぶことになったと見ることもできるだろう。スィアブ・バザール側からタシュケント通りをまっすぐ進めばそのままカリモフ廟にたどり着けるよう、高架橋が建設されることとなった。現地の案内板には「ウズベキスタン共和国初代大統領 I. A. カリモフ記念複合施設 (O‘zbekiston Respublikasi Birinchi Prezidenti I. A. Karimovning yodgorlik majmuasi / Мемориальный комплекс Первого Президента Республики Узбекистан И. А. Каримова)」と記載されており、ハズラティ・ヒズル・モスクの名称も公には使われなくなるのかもしれない。

レギスタン広場からタシュケント通りへ

カリモフ廟の完成によって、この地区の様変わりもひと段落したかのようである。レギスタン広場からカリモフ廟へと歩いてみれば、そこはゆっくりしたペースで30分ほどのひとつながりのルートとなり、道も舗装されていて、実に快適に散策ができる。

筆者が訪問した折、レギスタン広場には数組の華やかな婚礼衣装のカップルの姿が見えた。近年のウズベキスタンでは結婚の記念に美しく演出された画像を残すこと（その撮影は「フォト・セッション」と呼ばれる）が流行しており、レギスタン広場は格好の撮影場所になっているようだ。撮影が終わると、カップルはレギスタン広場を正面に見て右方向へ移動していく。その後を追うように進むと、タシュケント通りに接続する小道が整備されている。その小道がまっすぐ伸びる先に視線を向ければ、カリモフ像が目に入る。カップルはその像に花束を捧げに行く。

タシュケント通りは歩行者天国になっているが、観光客向けの電気自動車がスィアブ・バザールの前あたりまで往復している。夏の暑い盛りのこと、日が落ちる頃になると地元の人たちも三々五々散歩に出てきて賑やかになる。昨年から登場したという貸自転車屋が中国製の自転車を並べ、地元の子供たちが嬉々として自転車を乗り回していた。

タシュケント通りはかつてのシルクロードだとも伝えられる通りであり、観光客にとっても目貫通りだが、有名なモスクや墓廟などの歴史的建築物、みやげ物店、カフェ、ホテルなどとならんで、あえて注意を向けるなら、そこには今、カリモフ像、カリモフの学んだ学校、そしてその先にカリモフ廟と、結果としてカリモフゆかりの場所が集中している。

スィアブ・バザール側からハズラティ・ヒズル・モスクへ向かうのを阻んでいる道路の上には、両端に門扉のついた高架橋が開通した。自転車で、あるいは犬を連れてここをわたるのは禁止という表示がある。この橋の前で、カリモフ廟をバックに記念撮影をする人も多い。

うかつにも歩き始めてからだいぶ後になって、タシュケント通りの名称自体が「イスラム・カリモフ通り」に変更されており、それは高架橋を経て、カリモフ廟入口前の道へとつながっているのに気が付いたのだった。



写真2 完成したカリモフ廟
(写真1とほぼ同じ位置から撮ったもの)

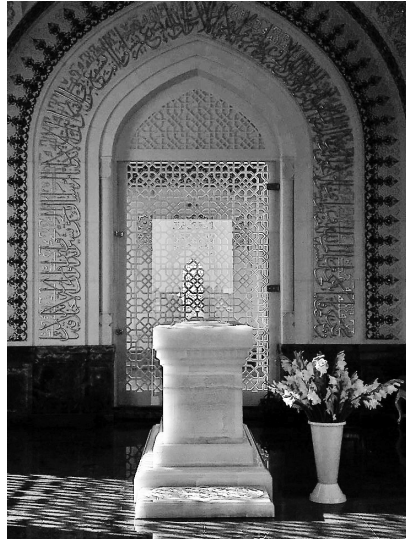


写真3 カリモフ廟の内部

イスラム・カリモフ廟

橋をわたると、タシュケント通りあらためイスラム・カリモフ通りの左手上にモスクのアイヴァン、それに隣接する本来のモスク正面入口、ミナレットなどを見ながらカリモフ廟へ上る階段があるのだが、参詣者はまずは通り右手に設けられた清めの場所に立ち寄る。人々がぐるりと囲めるよう、泉を模したかのように水場が円形に造られており、いくつか水道栓が設置され、茶碗が置かれている。(ただし、胸ほどの高さに造られているので、ここで足まで清めることはできない。)ドレス・コードの表示が目を引いた。男性はショートパンツ禁止、女性はノースリーブとミニスカート禁止・スカーフ着用のこと、と指示している。この水場の奥には小さな建物があり、より本格的な清めを行いたい人はそちらへ入るのかもしれないが、確認はできなかった。

いよいよカリモフ廟へと階段を上ると、「これは、ウズベキスタン共和国初代大統領、偉大なる国家人・政治家にして、敬うべき誉れあるウズベク民族の息子、イスラム・カリモフが眠る聖なる永遠の場所である」とウズベク語と英語で記された御影石が置かれている。その後ろ側、かつて盛り土のあった場所に、ドーム屋根を冠し、四方の外壁を幾何学模様とカリグラフィで彩った、あまり大きくはないが派手さを抑えた美しい廟が完成していた。正面の木彫扉が開かれており、ほの暗い廟の中に真っ白な墓石が浮かび上がるように見えた(写真2、3)。

廟の背後には、回廊風に木彫の柱が支える屋根のかかったスペースがコの字型に造られ、参詣者用のベンチが置かれている。その一部はガラス張りでソファの置かれたVIP室になっ

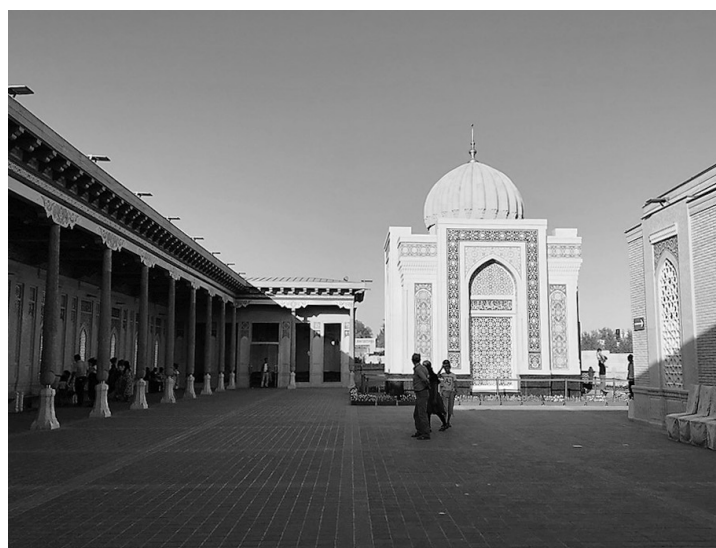


写真4 カリモフ廟とその周囲

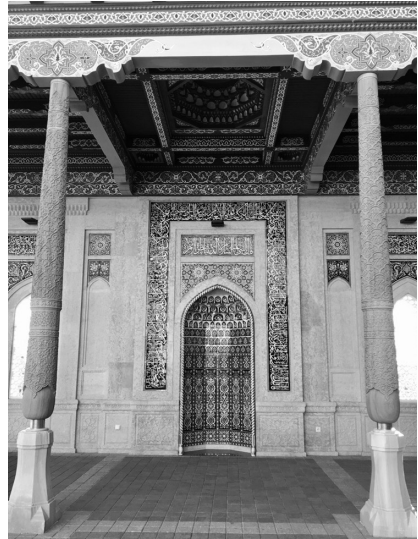


写真5 壁面のミフラーブ

ている。この回廊風の壁面にはミフラーブと思しき窪みも設けられている(写真4、5)。壁面は幾何学模様とカリグラフィで埋め尽くされているが、カリグラフィにはアラビア文字のほか、現代ウズベク語と英語が含まれている。これらの言葉は何に由来するのだろうかと少々気になる。コの字の空いた部分には、屋根はないがやはり参詣者用の椅子が並べられている。

廟を見た後、参詣者はこのベンチや椅子に腰を下ろし、しばしイマームの祈祷に耳を傾ける。イマームは1名がここに常駐しているらしく、筆者の訪問時にはグレーの長衣に黒っぽいドッピ(ウズベク帽)を着けたイマームが、集まってくる人々の数を見ながら、数分おきに祈りの言葉をマイクに乗せて発していた。参詣者は両手を胸の前に捧げて祈祷を聞き、最後に両手で顔をなで、立ち上がり、出口へ向かう。カリモフの葬儀以降、筆者はカリモフの生涯は最後にウズベキスタンにとっての「よきイスラーム」の衣で覆われたのだという印象を抱いたが[帯谷 2017: 51-52]、おそらくは伝統的な聖者廟の様式を模して造られたであろうこの墓廟を見て、ますますその思いを強くしたのである。

回廊風のスペースの外へ出ると、下へ降りる階段につながっている。その階段上に立った時、カリモフ廟がなぜここに造られることになったのか、わかったような気がした。そこからは、連綿と続く山々を背景に、ビビ・ハニム・モスクなどの壮麗な建築物を含む美しきサマルカンドを見はるかすことができるのだ。街の喧騒は遠く、静かな絶景が眼下に広がる(写真6)。その風景は訪れた者にどこか清々しく、ありがたいような気持ちをいやおうなく呼び起こすように思われた。



写真6 ビビ・ハニム・モスク方面を望む

雑感

もちろん筆者の訪問時に限った観察ではあるが、カリモフ廟を訪れる人たちは、実に様々であった。外国人観光客よりはウズベキスタンの人々のほうが圧倒的に多かった。その中には、とても厳粛な面持ちで参詣している人もおり、女性の中にはきちんと頭をスカーフで覆って、廟の敷地に入ってくる人も見られた。一方で、完全に物見遊山気分で、廟を背景にセルフィーを撮ることにひたすら熱心な人も多かった。アイスクリームを食べながら参詣している家族連れもいた。警察官が1名、入口付近で警備にあたっていたが、最近の外国人観光客優先政策もあってか、監視の目を光らせたり、参詣者に何か注意するような様子はまったくなく、撮影禁止の表示はあるものの、それは完全に名目的になっていた。ほぼすべての参詣者が携帯電話やカメラで写真を撮っているが、誰もそれをとがめはしない。筆者もはばかることなく写真を撮ることができた。先に述べたように、ドレス・コードの表示はあったが、それも強制されることはなく、ショート・パンツの男性やノースリーブの女性が注意を受けることもなく、女性用のスカーフの貸し出しなども行われていなかった。一言でいえば、参詣は、予想に反するほどに、かなり自由であった。

参詣者には、故人となった初代大統領への崇敬の念、聖者廟参詣の作法を守る敬虔さ、美しく整備された新しい名所を一度は見てみたいという好奇心、そうしたものが交錯しているような印象を受けた。滞在中にたまたまサマルカンド観光に来ていた親族のグループと知り合いになったが、フェルガナ地方在住だという最年長の女性がカリモフ廟への参詣にこだわっていたのに対し、今はロシアで暮らすという他の家族は、「時間がないし、聖者廟へ行

きたいならシャーヒ・ズインダへ行ったらいいでしょう、そのほうがご利益がありますよ」などと彼女を説得していたのが印象に残った。トルクメニスタンの初代大統領サパルムラト・ニヤゾフの墓廟は公開後数年たつと訪れる人もまばらになったと聞かすが、果たしてカリモフ廟が新しい「聖地」あるいは「聖者廟」として定着するのだろうか、それはこれからまだ見守るべきことだろう。かつてのハズラティ・ヒズル・モスクのひなびた古色は一掃されてしまった感は否めないが(この点では、ウズベキスタンで近年問題にもなっている、文化財保護と観光資源整備と都市の再開発がうまくかみ合わない事態がここでも生じているらしいことは大いに気になる)、その一方で、おそらくは現代ウズベキスタン工芸の粋を尽くし、清潔なトイレや、階段の上り下りが困難な人用にガラス張りのエレベーターも設置するなど、近代的な設備を整えた新しい名所がサマルカンドに誕生したこと、今後ここにより多くの人が訪れるようになることは疑いないように思われた。そこに人々がどのような思いを持ってやってくるのかはまた別の次元の(しかし興味深い)問題だ。少々うがった見方をすれば、カリモフ廟の建設と未着手の地区改造が表裏一体で進められたのかもしれない。

カリモフの「記憶の永久化」についていえば、関連する施設の建設としてはサマルカンドにカリモフ博物館の設置が決定されていたはずだが、これについてはサマルカンドでも特に具体的な情報は得られなかった。また、カリモフの生涯を描いた映画製作や文芸作品についても進捗は伝えられていないようである。

最後に、若干蛇足ながら、シャフカト・ミルズィヨエフ新大統領の推進する観光振興策等によってウズベキスタン滞在が格段に便利になってきていると実感したことも付け加えておきたい。2018年2月から日本も対象国となって導入されたヴィザなし渡航については、1カ月以内の滞在であれば、出発前にも空港到着後も何の手続きも支払いも必要ない。到着後はパスポート・コントロールに直行し、パスポートを提示するのみである。居住登録(いわゆるレジストラーツィヤ)は相変わらず必要だが、オンライン登録が導入された。以前はホテルによりばらばらな形式の紙片をもらったが、オンライン登録結果がプリントアウトされた統一形式のものとなった。チェックイン、チェックアウトの時刻まで記載されるので、チェックアウト時にそれを受け取ることになる(紙片であることは変わらない)。複数のホテルに宿泊する場合は、二番目以降のホテルでは直前のホテルでもらった紙片の提示を求められる。また、観光客を支援する目的で設置されたという旅行者警察(Tourist Police)詰所の主な観光施設への設置、QRコードによる観光施設情報の提供などは、新しい試みとして目を引いた。警察官等に対するモラル教育も強化されていると聞く。WiFiのある小規模で快適なホテル、あるいはリーズナブルなカフェやレストランの増加・多様化・近代化も著しく進展しているように感じられ、調査目的の滞在にも益するところは大きいだろう。

参考文献

帯谷知可 2017 「ウズベキスタン共和国故カリモフ初代大統領の『記憶』と『記念』：ポスト・カリモフ時代の胎動」『ユーラシア研究』56、48-53頁。

帯谷知可 2018 「建国とナショナリズムの神話：故イスラム・カリモフ初代大統領をめぐる『記憶の永久化』」帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための60章』東京：明石書店、290-293頁。

(京都大学)